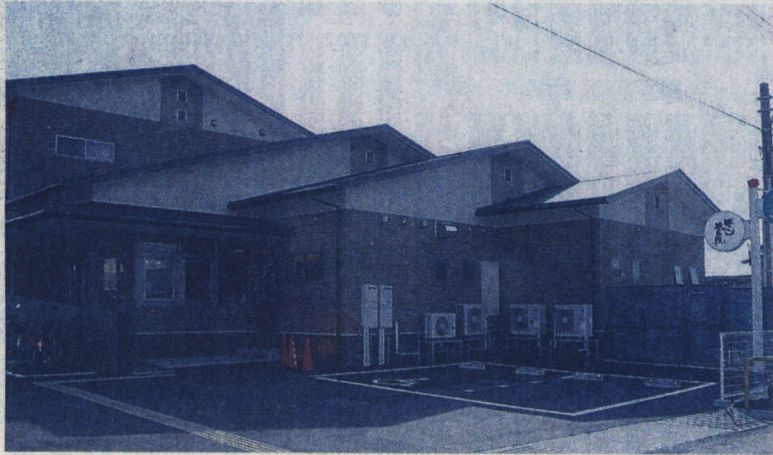


高松市の助産院から



ぼっこ便り

山本 文子



赤ちゃんから高齢者までが集う全国初の複合施設「ぼっこ助産院」―高松市

◇やまもと・ふみこ 1944(昭和19)年、高知県生まれ。助産師。67年、北海道大医学部附属助産婦学校卒業。99年、いのちの応援舎設立。今年2月、「ぼっこ助産院」開設。

ぼっこ助産院。この助産院の設計に当たって三人の助産師が知恵を出し合って計画を立てました。お母さん本位、赤ちゃん主役の助産院をつくるために一生懸命考えました。三人の長い産科病棟勤務の経験を生かした結果、できたのがベッドを置いた洋間が三部屋と八畳の和室一部屋でした。

予想外…ベッドより和室に人気

病院では洋間にベッドが主流です。こんなところにも、お母さんたちの希望と実際にわれわれがやってきたことに隔たりがあったことを今さらながら考えさせられました。ここではお産を終えたばかりのお母さんの思いや、お父さんの感想などをノートに書いてもらっています。和室のよさがお母さんの手記を読んだ分かります。ご主人に背中をあずけ、上の子に励まされながらのお産はとても心強かったようです。二両親をはじめ家族そろっての食事、その夜の一家での宿泊は「家族のきずなが深まった一夜だ」と書いておられました。これは和室だからできることなのです。ここでそのお母さんの手記を紹介します。

◇ 平成十八年三月十一日午後一時七分、夫、長男と実家の母の立ち会いのもと、三人の先生に支え、見守られながら「ぼっこ助産院」にて待ちに待った二男を無事出産することができました。

出産の間、まだ二歳にも満たない長男も、私の手を握り「ママがんばって」と励ましてくれたこと、生まれた瞬間、夫と私、長男と手を握り合って感動したこと。私は涙を抑えることができず声を上げて泣いてしまいました。その時間をみんなで見ることができて、今までより強い気がしました。

◇ 退院するとき、あるお父さんは、分娩(ぶんべん)費用を支払いながら笑顔で言ってくれました。「大満足です。必ず子どもを見せに来ます」。私たちにとって何よりうれしい言葉でした。

開院して三カ月がたちました。五月には六人のお産が控えています。いっそのこと洋間を和室に改造しようかと思案しているところです。

(隔月掲載)